台大日本語文研究第 46 期
2023 年 12 月，頁 1-22
2023-09-24 收稿，2023-11-20 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP.202312_(46).0001

比較川端康成與村上春樹寫的「跨時空題材」

以《掌之小説》「不死」和《城市與其不確定的牆》為例

曾秋桂*

摘要

川端康成於 1968 年獲得諾貝爾文學獎。當時，據說獲獎的原因是“故事的掌握，以出色的敏感度表達了日本精神的精髓。”另一方面，村上春樹獲得諾貝爾文學獎與否，也常被人們津津樂道。因此，構思套上川端康成獲獎的原因，來探討比較此兩位作家的文學創作。

具體作品設定為被歸類為「跨時空題材」的《掌之小說》中收錄的「不死」，以及村上春樹的《城市與其不確定的牆》。因為此兩部作品都與生死、靈體息息相關。透過比對研究，發現有兩個共同點。一為戀人相隔多年後在死後的世界重逢。二為從生至死皆有連貫接續性。而不同的是，《城市與其不確定的牆》具有在「死者世界」和「生者世界」之間來回的空間移動模式，此是川端沒有的，村上春樹的擅長。

川端康成和村上春樹在處理「跨時空」這個主題時，展現了各自的本領。各自的風格描寫都觸動了日本人的心，帶出各自獨特的「醍醐味」。此乃是川端康成和村上春樹兩位在日本文學史上，佔有一席之真正價值。

關鍵詞：川端康成、村上春樹、跨時空題材、「不死」、
《城市與其不確定的牆》

臺大學術期刊資料庫

* 淡江大學日本語文學系教授

"Theme of Super Space-Time" drawn by Yasunari Kawabata and Haruki Murakami: Comparing "*The Palm Novel*" "*Immortality*" and "*The City and Its Uncertain Walls*"

Tseng Chiu Kuei*

Abstract

Yasunari Kawabata won the Nobel Prize in Literature in 1968. At the time, the reason for his award was said to be "the skill of his narrative, which expresses the essence of the Japanese heart with excellent sensitivity." On the other hand, Haruki Murakami's potential Nobel Prize in Literature is often discussed. Therefore, by applying the reason for Kawabata's award to Murakami's literature, I have made a comparative study of the literary creations of the two.

In this way, both Kawabata Yasunari and Haruki Murakami have demonstrated their respective strengths when dealing with " Theme of Super Space-Time." Each of their depictions shakes the Japanese heart, and it can be inferred that they produce a unique "flavor" that is unique to each of them. This is indeed the true value that justifies why the fame of Yasunari Kawabata and Haruki Murakami has not faded and is engraved in the history of Japanese literature.

Key words: Yasunari Kawabata, Haruki Murakami, Theme of Super Space-Time, "Immortality", "*The City and Its Uncertain Walls*"

臺大學術期刊資料庫

* Professor, Department of Japanese Language and Culture, Fu Jen Catholic University, Taiwan.

川端康成と村上春樹の描いた「超時空の主題」
―『掌の小説』「不死」と『街とその不確かな壁』を比較して―

曽秋桂*

要旨

川端康成が 1968 年にノーベル文学賞を受賞した。当時に授賞理由を「日本人の心の精髄を優れた感受性で表現する、その物語の巧みさ」とされたそうである。一方、村上春樹のノーベル文学賞受賞がよく話題に上っている。そこで、川端康成が受賞した理由を村上春樹文学に当てて、両者の文学を比較することを問題意識とした。

「超時空の主題」と分類された川端康成の『掌の小説』「不死」と村上春樹の『街とその不確かな壁』を取り扱うことにした。それは死生・霊感と大きく関わっているからである。そこで死後の世界で恋人同士は年がかけ離れてから再会を果たしたこと、生から死へと地続きしている形の 2 点が共通点として挙げられる。一方、「死者の世界」と「生者の世界」を行き来する空間的な移動パターンが、『街とその不確かな壁』にあり、村上春樹が得意とした所が見られる。

このように、「超時空の主題」を取り扱った川端康成と村上春樹が各自の本領を発揮し、各自の描出が日本人の心を揺さぶり、両者ならではの「醍醐味」を醸し出していると窺われる。それこそ、川端康成と村上春樹が日本文学史に刻まれているに値する真価だと認められよう。

キーワード：川端康成、村上春樹、超時空の主題、「不死」、『街とその不確かな壁』

臺大學術期刊資料庫

* 淡江大学日本語学科教授

川端康成と村上春樹の描いた「超時空の主題」
―『掌の小説』「不死」と『街とその不確かな壁』を比較して―

曽秋桂

一、はじめに

川端康成が 1968 年にノーベル文学賞を初めて受賞した日本人作家である。引き続き、1994 年に大江健三郎がノーベル文学賞の栄冠を勝ち取った。あれから、ノーベル文学賞の有力立候補者として村上春樹の名がよく挙げられている。NHK の新聞記者河合哲朗によれば、川端康成がノーベル文学賞を受賞した 1968 年の当時に授賞理由を、「日本人の心の精髄を優れた感受性で表現する、その物語の巧みさ」[1]（下線部分は論者による。以下同様）とされ、受賞から 50 年が経った 2019 年に初めて公開された当時の選考資料では、「日本文学の真の代表者として、彼に賞を与えることは正当である」[2]と明記されているそうである。

一方、村上春樹がノーベル文学賞を受賞するかどうかは、長年話題となっている。世界的の動きに伴い、文学志向の流行や選考基準はもちろん変わっているが、川端康成が受賞した理由の「日本人の心の精髄を優れた感受性で表現する、その物語の巧みさ」を試しに村上春樹文学に当てて、両者の文学創作を対照比較することは、本論文の出発点である。ちなみに、村上春樹はかつてインタビューされた時に、「僕は三島や川端とは、多くの点でまったく異なります。とりわけ文体がちがいますが、しかしそれだけではありません。彼らの散文は形式美に重きをおいたものであり、曖昧で、高踏的で感情で飾りつけられています。僕が求めているものは自然でシンプル

[1] https://www3.nhk.or.jp/news/special/nobelprize/2020/literature/article_02_01.html（2023 年 2 月 18 日閲覧）
[2] https://www3.nhk.or.jp/news/special/nobelprize/2020/literature/article_02_01.html（2023 年 2 月 18 日閲覧）

臺灣學術期刊資料庫

な文章です。しなやかで、飾りけのないものです」[3]と、川端文学と異なった点を挙げて説明している。

さて、川端康成と村上春樹を比較するに当たり、研究対象を選出しなければならない。周知の如く、『雪国』や『伊豆の踊子』などの作品で知られる川端康成の日本的な表現が、アカデミー的に高く評価されているが、「文壇登場の初期から、その晩年、死の直前にいたるまで」[4]書き続けた『掌の小説』[5]については、長谷川泉が「川端文学を特色づけるもの」[6]だと絶賛している。また、松坂俊夫も「川端文学における小説発想は、長篇も中篇も、『掌の小説』も、基本的には等しいのではないか。（中略）『掌の小説』は、いわば川端文学の源流としての位置を占め続けているといっていい」[7]と高く評価している。このように、『掌の小説』が川端康成文学の源流であると共に、川端文学を特色づける精髄でもあるという見方が一般的である。

そして、「掌の小説」の定義、特色などに関する論争がほぼ定着している。例えば、川端の「短篇小説の新傾向」（大正 14.6）に基づき、川端の意見を踏まえた上、鳥羽徹哉が川端の「掌の小説」を「人生と解釈とを組み合わせた作品、客観的現実と作者の主観的解釈（人生観・哲学）とを統一した作品」[8]と定義し、「日常生活のちょっとしたスケッチなどではなく、優れた結晶力と鋭い輝きを持ち、形式は短くとも深く広い内容を蔵するもの」[9]と肯定している。また、『掌

---

3 村上春樹（2012）「書くことは、ちょうど、目覚めながら夢見るようなもの」『夢を見るために毎朝僕は目覚めるのです　村上春樹インタビュー集 1997-2011』文藝春秋 P157

4 長谷川泉（2001）「全文が散文詩」川端文学研究会編『論集川端康成―掌の小説』おうふう P1

5 本論文では、「掌の小説」を「てのひらのしょうせつ」ではなく、長谷川泉（1977）「掌の小説」論」『川端康成研究叢書 2 詩魂の源流掌の小説』教育出版センターで主張した「たなごころのしょうせつ」の読み方に従うことにする。

6 長谷川泉（2001）「全文が散文詩」川端文学研究会編『論集川端康成―掌の小説』おうふう P1

7 松坂俊夫（1971）「「掌の小説」小論―川端文学の源流」『川端康成の人間と芸術』教育研究センター

8 鳥羽徹哉（2001）「掌の小説について」川端文学研究会編『論集川端康成―掌の小説』おうふう P19

9 鳥羽徹哉（2001）「掌の小説について」川端文学研究会編『論集川端康成―掌の小説』おうふう P20

臺大學術期刊資料庫

の小説』の作品群[10]を内容的に分類した諸説[11]を多く纏めた林武志の労作[12]を参考にすると、バトグラフィ（病跡学）の観点から、「死の主題」、「かなしい女の主題」、「超時空の主題（一超能力に関するもの、二霊的世界、三幻想の世界、四夢）」、「宗教（一仏教、二キリスト教、三民間信仰）」[13]の四種類に大別している稲村博の論説が示唆的である。すると、死生・霊感と大きく関わる「超時空の主題」と分類され、「作家川端の晩年の祈り」[14]と位置付けられた「不死」という作品が興味深く感じられる。というのは、村上春樹の最新長編小説『街とその不確かな壁』（2023、新潮社）にも死生・霊感と大きく関わる「超時空の主題」と似通った描写が見られるからである。なお、川端康成の『掌の小説』に収録された「不死」と村上春樹の『街とその不確かな壁』との関係が既に小川洋子に触れらたが、残念ながら具体的な用例を挙げて両作品の関連付けをされていない[15]。

このように、ノーベル文学賞受賞はともかく、世界的に名高い川

---

10 川端文学研究会編（2001）「〈掌の小説〉の一覧表」『論集川端康成―掌の小説』おうふう P300-308 を見て分かるように、松坂俊夫、長谷川泉、森晴雄、石川巧が各自の基準を設けて、作品数を 175 篇、147 篇、173 篇、165 篇といったように主張した。上記の諸説を纏めた鳥羽徹哉が作品数を 142～156 篇にした。一方、作品数を 150～180 篇近くとした林武志の説（「「掌の小説」論―基本的性格をめぐる試論―」川端文学研究会編（2001）『論集川端康成―掌の小説』おうふう P25）も見られる。

11 鳥羽徹哉は、川端文学研究会編（2001）『論集川端康成―掌の小説』おうふう P22-23 では、掌の小説を、「自然主義から発達した私小説的な性格を持っている」もの、「通りすがりの語り手が目に留めたある情報の報告（中略）新現実主義と言われた芥川等の方法に通う」もの、「語り手が作中で説明を入れ、解説するという書き方になっており、やはり新現実主義的」ものの三種類に分類している。また、林武志（2001）「「掌の小説」論―基本的性格をめぐる試論―」川端文学研究会編『論集川端康成―掌の小説』おうふう P25-26 では、伊藤整が分類した、テーマ小説というものの圧縮型、ある生活の一場面のよくまとまった写生文としてのこの短い散文型式、散文詩風邪の幻想や夢を描いたもの、生の認識を短く鋭くまとめたものの四種類に触れられている。また神秘性を説いた瀬沼茂樹も提起されている。

12 林武志（2001）「「掌の小説」論―基本的性格をめぐる試論―」川端文学研究会編『論集川端康成―掌の小説』おうふう P28-30 では、「題材・取材の面」（2 種類）、「内容の面から」（10 種類）に分けた松坂俊夫の説、「輪廻転生思想」、「不滅の生への信仰」に重点が置かれた鳥羽徹哉の説、「土地からの解放」、「コスモポリタニズム」、「心霊学」に注目した渋川の説、病跡学の観点から四分類した稲村博の説などを纏めた。

13 稲村博（1975）『川端康成』金剛出版

14 山田吉郎（2001）「樹木と精霊の系譜―川端康成「不死」論―」川端文学研究会編『論集川端康成―掌の小説』おうふう P281

15 小川洋子（2023）「垂直移動に耐える」『新潮』第 6 号新潮社 P135-137

台大日本語文研究 期刊資料庫

端康成と村上春樹の持つ「日本人の心の精髄を優れた感受性で表現する、その物語の巧みさ」の究明を出発点とし、具体的に「不死」と『街とその不確かな壁』と比較することにする。これにより、川端康成と村上春樹が描出した、生死・霊感と大きく関わる「超時空の主題」を明らかにしたいのである。

二、川端康成『掌の小説』の「不死」における生と死

「不死」が『朝日新聞・PR版』(昭和38年8月4日、1963)に発表されたものであり、のちに「秋の雨」と一緒に『川端康成短篇全集』(1964、講談社)に初収録された[16]。山田吉郎が「川端康成の掌篇『不死』は、他の川端作品には見られない特異な構造をなしている」[17]と指摘している。

第三人称の語り手によって語った「不死」の登場人物の娘(みさ子)と老人(新太郎)は、「年がおそらく六十もちがふのを、おたがひに感じないかのやうに、戀人の姿で寄りそつてゐた」(P510)。みさ子が新太郎に「別れさせられるのをかなしんで」(P512)、18歳の時に海に身投げ、自殺した。「あたしは身投げしてよかつたよ。身投げした時のまま、(中略)あたしの記憶も追憶も、十八の年までしかないの」(P512)と言ったように、みさ子が18歳のままである一方、新太郎が彼女の自殺後、年老いた老人となったため、恋人同士の二人が釣り合わない「娘と老人」の構図のように人の目に映っている。このように、死者が亡くなった時点の年齢の姿でいられるのに対して、生きている人が年に齢を重ねて年老いていく。

ここでは、亡くなった時点から年を取らなくなる死者と、年に齢を重ねていく生者との対照的描写が、実は村上春樹の処女作『風の歌を聴け』(1979)にも見られる。「若くして死んだ女について語ることはもっとむずかしい。死んでしまったことによって、彼女たち

国立国会図書館期刊資料庫

16 (1983・初1981)『川端康成全集第一巻』新潮社 P583-584
17 山田吉郎(2001)「樹木と精霊の系譜—川端康成「不死」論—」川端文学研究会編『論集川端康成—掌の小説』おうふう P275

は永遠に若いからだ」（P77）、「それに反して生き残った僕たちは一年ごと、一月ごと、一日ごとに齢を取っていく」（P78）とあるように、「不死」と似通った考え方が示されている。また、「不死」の登場人物のみさ子が「新太郎さんに死なれたら、新太郎さんのやうにみさ子を思い出してくれる人は、この世に一人もゐなくなるんだもの。あたしはほんたうに死んでしまふぢやないの?」（P512）から覗かれるように、この世にいる生者があの世へ行った死者を偲ばないと、死者がこの世で本当に死んでしまうことになる。それも村上春樹の『女のいない男たち』（2014）に収録された「独立器官」に見られる。それは「僕らが死んだ人に対してできることといえば、少しでも長くその人のことを記憶しておくくらいです」（P163）という言葉と軌を一にしている。この二点が川端康成と村上春樹との間で共通していると言ってもよかろう。

次は、死者の恋人同志が再会を果たせることは、機縁によるということである。ゴルフ練習場を散歩後、「『行きませう。』と、いそぐ娘に老人は手を引かれて、よろよろと大樹に近づいた。娘は木の幹のなかを、すうつと通り抜けた。老人も通り抜けた」（P513）。通り抜けた老人の様子を見たみさ子は、驚いて「新太郎さんも死んでゐるの?」（P513）と疑い、「死生のためしに幹を通つてみてね。新太郎さんが死んでゐるのなら、いつしょに木のなかへはいつてしまつてもいいわね」（P513-514）と勧めたが、それは、死者でなければ、木の幹を通り抜けることが出来ないからである。結末に「大樹の幹のなかに消えて、老人も娘も出ては來なかつた」（P514）ことは、新太郎が「死生のためし」に通った死者だということが証明された。しかし、みさ子と同じ死者とは言え、「死んでゐるのねえ。ほんとう……死の世界では會へなかつたの。ふしぎねえ」（P513）と、みさ子が死後の世界で二人がすぐ会えなかったことを「ふしぎ」がっている。それは二人が同じ死者になっても会えるとは限らないし、再会できる何らかの機縁がないと、二人の再会が難しいように思われる。死後の世界での再会が、生から死へ繋がっており、実らない恋が生前

臺大學術期刊資料庫

ではなく死後になってからようやく成就できたのである。「不死」の内容を死後の恋の成就だけならば、題名「不死」の持つ不滅、永遠の意味を見出すには無理がある。それを補うために、娘と老人の行き先の「大樹」のことから考えなければならない。

「大樹」のことについては、山田吉郎が「『高原』、『古都』をはじめ中期以降の川端文学に底流する樹木のモチーフに基づいていると推測され、(中略) 作家川端康成の死生観、生命観といったものが重く介在している」[18]と述べており、「樹木と人の営為の融合、同化」[19]に触れ、「樹木と人間が霊的とも言える繋がりをはらむ発想がたしかに存在する」[20]と指摘している。さらに、こういった発想から「川端文学が生涯をかけて描きつづけてきた魂の救いと安息、万物一如、転生、不死といったライトモチーフ」[21]が構図化されたと山田吉郎は主張している。同様に、細島大は「不死」という作品に注目し、「「大樹」も《長寿》や《永遠》を象徴するもの」とし[22]、「〈大樹〉という《永遠》、即ち生死を超越した〈不死〉の世界で、はじめてその愛を成就するのである。川端における《万物一如・輪廻転生》、思想をも視野に入れた考察が求められよう」[23]と強調している。通説が言った、「大樹」が〈永遠〉の意味を持ち、生死を超越した「不死」の世界であることは確かに納得いくが、しかし、「不死」に描かれた死後の恋の成就という内容を読んだ限り、死後の世界では、恋人同士の再会は、「万物一如・輪廻転生」に求めることを議論する余地はまだ十分に残されている。それは、生から死へ繋がり、「不死」の境地に達するには、「ふしぎ」がらせる機縁が欠かせないものとし、「万物

18 山田吉郎 (2001)「樹木と精霊の系譜—川端康成「不死」論—」川端文学研究会編『論集川端康成—掌の小説』おうふう P275-276
19 山田吉郎 (2001)「樹木と精霊の系譜—川端康成「不死」論—」川端文学研究会編『論集川端康成—掌の小説』おうふう P277
20 山田吉郎 (2001)「樹木と精霊の系譜—川端康成「不死」論—」川端文学研究会編『論集川端康成—掌の小説』おうふう P279
21 山田吉郎 (2001)「樹木と精霊の系譜—川端康成「不死」論—」川端文学研究会編『論集川端康成—掌の小説』おうふう P281
22 細島大 (1998)「不死」鳥羽徹哉・原善編『川端康成全作品研究辞典』勉誠出版 P315
23 細島大 (1998)「不死」鳥羽徹哉・原善編『川端康成全作品研究辞典』勉誠出版 P315

臺大藝術期刊資料庫

一如・輪廻転生」を起動する原動力でもなろう。それで、「永遠」、生死を超越した「不死」の世界を表す「万物一如・輪廻転生」の背後に、重要な働きを持つ機縁があることを忘れてはならない。

三、村上春樹『街とその不確かな壁』(2023、新潮社)における生と死

『街とその不確かな壁』が『騎士団長殺し』(2017、新潮社)に引き続いた6年ぶりの長編小説である。刊行後二か月も経たない2023年6月1日の時点で、「3冠達成！上半期ベストセラー総合一位」[24]となり、6月3日までは40万部を突破した[25]そうである。周知の如く、『街とその不確かな壁』は『文學界』(1980、9)に掲載された旧作中編「街と、その不確かな壁」を書き直した、同じ書名にした長編小説である。書名に句読点の打った箇所以外に、内容上、決定的違いはあまり見られない。

『街とその不確かな壁』の受け止め方[26]にいろいろあるが、今までの村上春樹創作のモチーフで重なった部分が多くあるため、それを読むと、邵丹が「既視感」[27]を抱く感想を漏らした。また、村上春樹がデビューした年の1979年に生まれた上田岳弘が「『街とその不確かな壁』で読まれるべきテーマの一つが「継承」である」[28]と肯定している一方、「生成AIが村上春樹になりすまして書いたような印象を受ける。その結果、彼の小説は社会環境との共鳴を失って硬直し、自家中毒に陥ってしまったのではないか」という福嶋亮大の酷

---

24 2023年6月1日付「トーハン調べ2023年上半期ベストセラー総合1位、日販調べ2023年上半期ベストセラー総合1位、オリコン調べ上半期BOOKランキング2023の1位と、3冠を達成いたしました」https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000001013.000047877.html（2023年6月1日閲覧）。

25 2023年6月3日付「上半期一番売れた本は村上春樹『街とその不確かな壁』40万部を突破」https://news.yahoo.co.jp/articles/cb4d091df7256a1715d7767772b3395ae61d8c66（2023年7月14日閲覧）

26 （2023）「【特集】七つの視座で読む村上春樹新作」『新潮』第6号新潮社

27 邵丹（2023）「村上春樹『街とその不確かな壁』長篇書評わが唯一つの望み」『群像』第78巻第7号P209では、「村上春樹が二〇二三年の四月に世に問うた『街とその不確かな壁』を紐解いたとき不思議な既視感を抱き、懐かしさのようなものを覚えた」とある。

28 上田岳弘（2023）「継承とリライト」『文學界』第6号文藝春秋P191

評もある[29]。賛否両論が分かれているが、その構造と特色を次に見よう。

（一）『街とその不確かな壁』における構造と特色[30]

『街とその不確かな壁』が第一人称視点による三部構成である。各部が占めた紙幅は、第一部（1-26 章、PP.7-184、27.1%）、第二部（27-62 章、PP.185-598、63.2%）、第三部（63-70 章、PP.599-655、8.7%）となっている。その分布を見て分かるように、全体の 63.2% も占めた第二部がとりわけ重要である。また、その第二部の 36 章のうち、分量が多く費やされた[31]30、33、35、36、37、44 章においては、登場人物の子易辰也が焦点化されている。ところが、子易が第 36 章に至って「影を持たぬ人間」（P287）、「幽霊」（P290）だということが判明した。言い換えれば、36 章までの登場人物子易が、人間の「仮初めの姿かたち」（P290）を「具象化」（P302）した幽霊なのである。そこで、「生者である私」（P305）と「死者である子易」（P305）のように、生と死を二項対立的に捉える傾向になりがちだが、「私」が子易と現実世界のごく普通の「日常生活のレベル」（P292）の同一空間において会話を交わしていることが特徴的である。作品の構造と筋が複雑のため、『街とその不確かな壁』の構造を下表に整理し、その特色を浮き彫りにさせることにする。

---

[29] 福嶋亮大は、「村上春樹による村上春樹のリマスターは成功したのか――『街とその不確かな壁 』評」では、「近年の村上の作品からは、いわば生成 AI が村上春樹になりすまして書いたような印象を受ける。その結果、彼の小説は社会環境との共鳴を失って硬直し、自家中毒に陥ってしまったのではないか」と批評している。また、「第一の問題は、肝心かなめの「壁」がうまく造形できていないことである」、「第二の問題は、主要なモチーフに深く付きあわず、あっさり放り出してしまっていることである」、「第三の問題は、（これはここ最近の村上の小説全般に言えることだが）キャラクターの動きが総じて事務的・機械的になってしまったことである」の三点を挙げて酷評している。https://realsound.jp/book/2023/04/post-1307772.html（2023 年 6 月 1 日閲覧）

[30] 詳しくは曽秋桂（2023）「『街とその不確かな壁』における幽霊子易辰也の人間「擬態」―連鎖する生と死―」『2023 年第 12 回村上春樹国際シンポジウム』P190-197 淡江大学村上春樹研究センターを参照されたい。

[31] 添田が子易の生前を語った第 39.40.41 章の分量も結構多くある。

表　『街とその不確かな壁』における構造と特色

項目／部	分布頁 / 比率	語り手の年齢/自称	特色（括弧の中にある数字が章を示すもの）	内容
第一部（1-26章）	P7-184/27.1%	*「実際の世界」での「ぼく」17歳/「きみ」16歳 *「壁に囲まれた街」での「私」45歳/「君」16歳 *一人残された「実際の世界」での中年の「私」45歳	←1.語り手と二人が登場するパート（1.2.4.6.8.11.13.15.17.19） ←2.「壁に囲まれた街」のパートが挿入（3.5.7.9.10.12.14.16.18.20.22.24.25.26） ←3.中年の語り手「私」が出るパート（21.23[32]）	1.パラレルワールド（死/生）を往還 2.現在と過去の記憶を往還
第二部（27-62章）	P185-598/63.2%	45歳/「私」	1.「幽霊」の子易辰也との出逢い 2.サヴァン症候群らしい「イエロー・サブマリンの少年」に「壁に囲まれた街」の地図を渡されたこと	福島県「Z＊＊町図書館」（P213）へ赴任
第三部（63-70章）	P599-655/8.7%）	壁に囲まれた街での「私」45歳/「君」16歳/潜入した「イエロー・サブマリ	1.「私」がその街で「夢読み」をする日常生活 2.街に「不法滞在」（P626）している「イエロー・サブマリンの	1.「意識の底にある真四角な小部屋（P643） 2.街に残ることにする少年と町

[32] 第23章の前半では、中年の「私」のことが触れられているが、途中に「夢を見る」こと、最後に「壁に囲まれた街」の様子が触れられている。

臺大學術期刊資料庫

		ンの少年」16 歳か 17 歳	少年」との一体化	から出ることにする「私」の決心

（二）「死者の世界」と「生者の世界」を往還する「私」の超時空的な物語

上表を見て分かるように、第一部では、現時点「実際の世界」（P14）で「四十五歳」（P164）の語り手の「ぼく」が 16 歳の「秋」（P24）に開催した「高校生のエッセイ・コンクールの表彰式」（P24）[33]で「きみ」と知り合い、「親しく交際するようになって八ケ月」（P14）間のことを「素晴らしい夏」（P108）だと回想した。その「きみ」から「本当のわたしが生きて暮らしているのは、高い壁に囲まれたその街の中」（P9）、「今ここにいるわたしは、本当のわたしじゃない。（中略）ただの移ろう影のようなもの」（P9）と聞かされた。と同時に「もしあなたが本当に、本当のわたしを求めているのなら」（P10）を前提に、その街へ行く方法を「ただ望めばいい」（P11）とも教えてもらった。17 歳の「秋」（P112）に「きみ」からの消息が途絶え、「更に孤独になる」（P144）「ぼく」が、「影を棄てて」（P55）その街に入っていった。その街で 45 歳の「私」が「君」と再会したが、嘗て「きみ」が「実際の世界」（P14）で宣告した通り、「そこにいるわたしはあなたのことを何ひとつ覚えてはいな」（P12）く、「まだ十六歳[34]のままなのに、私はもう十七歳ではな」（P31）く、「遙かに年上の男性」（P31）であった。そしてその街の図書館で「夢読み」（P12）の職務を与えられた「私」を、「君」は「手伝」（P12）ってくれた。最後に「私」の影にその街からの脱出を誘われて応じたが、脱出直前[35]に「その世界でますます孤独になっていくだろう」（P180-181）

[33] その時のことを 45 歳の語り手が「私は君に――彼女に恋をしたんだ。あっという間もなく、私はそのとき十六歳、彼女は十五歳だった」（P158）と回想している。

[34] 第一部第 5 章にある、その街で「君」と再会した場所が「16」という数字が刻まれた真鍮のプレートが、素気なく打ち付けられているだけだ」（P28）とは、彼女が 16 歳のままであることを意味している。

[35] 3 回（14.16.20 章）自分の影に会った後、第 22 章では「この街を出ていくことになるかもしれない」（P156）と君に告げたが、結果的に急変した意志で果

を理由に、「私」が「この街に残る」（P182）ことにしたところで、第一部が終わった。このように、第一部の 17 歳「ぼく」と 16 歳「きみ」が登場したパート、「壁に囲まれた街」にいる 45 歳の「私」と 16 歳の「君」のパート、16 歳の「きみ」が消えた後、「一人で孤独に静かに暮らしてい」（P163）る 45 歳の中年「私」のパート、の 3 パート構造が指摘された[36]。なお、第 23 章まで整然されたパラレルワールド的な描き方が、中年の「私」のパートと「壁に囲まれた街」のパートを混合した第 23 章の後、交互的に入れ替わった形式が崩れてしまった。ちなみに、三部構成において、その使い分けた人称の表記[37]も注目に値する。

第二部は、「私」が「何らかの力」（P188）でその街から「現実の世界」（P188）に戻ってきた[38]ところから始まった。その後、勤務先の「書籍販売の会社」（P477）に「辞職願」（P189）を出して、「長い夢」（P195）を見た後、新しい仕事を図書館関係に決めた。そして後輩「大木」（P200）に仕事探しを頼んだ末、福島県の図書館に転職することになった。新しい勤務先で幽霊の元館長子易と対談したり、妻と子を失った子易の生前を司書添田から細く[39]長く[40]教えてもら

たせなかった。

36 「書評村上春樹さん 6 年ぶりの長編『街とその不確かな壁』迷宮をさまよう混沌世界」では、「第一部は 26 のパートからなり、ふたりが登場するパートと、中年の「私」が出るパートが、ほぼ交互に語られる。さらに、高い壁に囲まれた不思議な街のパートが挿入される」と指摘ている。https://books.j-cast.com/topics/2023/04/14020900.html（2023 年 5 月 20 日閲覧）

37 例えば、第 16 章では影が「一週間のうちなら、おれとあんたはもう一度一緒ににって、この街を出ていくことができる」（P125）とあるように、「おれ」と「あんた」を使っている。

38 「壁に囲まれた街」に入ってしまっている間、「実際の世界」で行われるべき職務に関しては、二説がある。一つは「私はずっとここにいて、どこにも行かず、ただただ長い夢を見ていただけなのだろうか?」（P187）の夢見る説である。もう一つは、影が代役を務める説である。それは第三部では、「あなたの影はあちら側で元気にくらしています」（P645）と少年が言った言葉を、「私」が「ここから逃れたぼくの影は外の世界で、ぼくの代役を問題なく勤めている――君はそういったね」と反問した箇所から読み取れる。

39 例えば、この町に地縁のない添田が「噂」を「私」に伝えたとはいえ、「それはおそらく彼女の精神のずっと深いところに生じている深刻な問題なのだ。自分がその生々しい心の傷をなんとか癒していくしかない――人生の同伴者として、それ以外に打つべき手はあるまい。たとえどれほど長く時間がかかるにせよ、どれほど多大な努力を要するにせよ」（40 章 P329）のような、添田が子易の内面に立ち入り、代弁したことを異様に思ってならない。

40 第 39、40、41 章の 3 章（P313-355）に渡る 43 頁の全体の 6.5%の分量を費やしたほど、添田が綿密に子易に関する情報を伝えている。

ったりした。また、「登校拒否」（P387）のため、図書館に通っている「十六歳か十七歳くらい」（P386）の、「サヴァン症候群」（P388）らしい「イエロー・サブマリンの少年」（P386）のことも教えてもらった。かつて生年月日を聞かれたり、「私」が子易の墓（P399）の前で語ったその街のことをその少年に盗み聞きされたり[41]した。その後、その街の「ほぼ正確な地図」（P417）、「改訂版」（P435）の地図を渡し、その街へ行く助けを「私」に求めたが、叶わなかった。少年がほどなく「パジャマ姿」（P509）で「失踪した」（P517）。もう一人の、離婚（P477）して、「札幌」（P477）から町に来て「コーヒーショップ」（P492）を開いた「三十六歳」（P481）の女性と知り合ったが、深い関係までの進展は見られない[42]まま、物語は終わってしまった。最後の章では、「その不確かな壁」（P589）を「通り抜け」（P589）て、「川を遡るにつれて」（P593）、「時間を逆行することによって」（P594）、「私」が「十六歳のまま」（P594）の彼女に辿りついたところで第二部の結末を迎えた。

第三部は、場所が再びその街に変わった。この町で失踪した後、その街に現れた「イエロー・サブマリンの少年」から出された「一体化」（P624）の要求に「私」は応じた。すると、合体後の「共同作業」（P634）で行う「夢読み」の「目覚ましい作業の進捗ぶり」（P634）は、16歳の「君」を「喜ばせ」（P624）た。最後に、「夢読み」を「天職」（P619）とした少年がその街に留まり、「この街を立ち去る」（P644）ことにした「私」が、「君」に「さよなら」（P651）と言い、「札幌」（P477）から来た「三十六歳」（P481）のコーヒーショップを経営している離婚（P477）した女性がいる元の町の世界に帰還しようとした。

『街とその不確かな壁』を読むに当たり、別に「街/あの世（死者

41 「墓地のどこかに身を潜めて（私がその存在に気づいたとき以外にも）、私が子易さんの墓に向けて語りかける話を聞き取り、そこで収集した「壁に囲まれた街」についての情報をもとに、街の地図を描き上げたということだ」（P418）と語り手が推測している。

42 第三部の「私」が「この街を立ち去る」（P644）根本な理由がここにあると推測されよう。

臺大機構期刊資料庫

の世界)」、「町/この世（生者の世界)」の二項対立的な形で読む必要はないが、しかし、その街が「死者の世界」だという読みは、前述の『風の歌を聴け』(1979) に先蹤が見られるため、村上春樹文学の軌跡を考えてはならない。その軌跡に即してみると、『街とその不確かな壁』が死者の世界と生者の世界を往還する「私」の超時空的な物語だと言っても差し支えない。

（三）必要とされた幽霊（死者）の子易の役割

超時空的な物語が「何と何かが繋がっている」(P219) 一つの物語に完成するため、幽霊(死者)の子易がどうしても必要される。「私」が「長い夢」(P195) を見た後、福島県の図書館の館長室に行って、面接を受けたが、その館長室が「長い夢」(P195) に出た様子と一致したことに驚き、そこで「何かと何かが繋がっている」(P219) と「私」が意識した。採用が決まった時に、「『影を一度なくしたあなたには、その資格があるのです』と言った」(P358) 子易の言葉に理解に苦しんでいた「私」が、その後、子易が幽霊だということを本人から直接に聞かされたが、子易が「実際に生きているまわりのどんな人よりも生命の息吹をありありと感じさせてくれる人物だ」(P430) と「私」が思えたのである。生前から親しくする、子易の「幽体」(P425)、「姿かたちをとった彼の魂」も見える[43]であろう「十六歳か十七歳くらい」(P386) の少年が、「死者の世界」の地図を思い描き、あの街（「死者の世界」）へ行くことを決心した。すると、「死者の世界」で再会した少年が「私」に「一体化」(P620) するように要求した。結局、少年がその街に留まり、その街から立ち去ろうとする「私」の「夢読み」の「後継者」(P647) となった。当然ながら、少年が「夢読み」を手伝う少女とは、第一部のような、17 歳の「ぼく」、いわば恋の後継者として 16 歳の「きみ」との恋を継がせてくれるに違いない。

[43] 「この姿が見えるのは、あなたの他には添田さん一人だけです」(P297) と子易が言ったが、少年にも見える可能性については、「「そうですね、それはおそらくあり得ることです」と添田さんは少し考えたあとで言った。「十分あり得ることだと私は思います」」(P425) とある。

臺灣日本語學會論文資料庫

今までの物語の進展を再度整理すると、子易の重要性が一層明確となる。物語の流れとしては、45歳の「私」→元館長の職を継ぐべき人として福島県の「Z＊＊町図書館」への赴任→幽霊の子易との親交→「十六歳か十七歳くらい」の少年を知る→福島県のある町で失踪した少年とその街での再会→その少年から「私」との「一体化」[44]を要求→「私」の「夢読み」仕事の「後継者」となった少年→「私」の不毛な恋の「後継者」として16歳の少女との恋を成就させた「十六歳か十七歳くらい」[45]少年（=時間が実質的に停止していた17歳の「私」[46]）となる。

要するに、第一部から始まり、第三部に終わるはずの物語だが、第三部が第一部へと繋がって盛り返すことにより、17歳の「ぼく」と16歳の「きみ」との恋物語が、「何かと何かが繋がっている」ように完結したのである。それを繋げる所に、子易という人物が位置している。すると、繋げる役割を果たした子易が何故幽霊でなくてはならないかというと、子易が幽霊でないと、「私」をわざわざ福島県の図書館の館長として迎える必要はなくなるからである。もし、「私」が福島県の図書館の館長として赴任しなかったら、その町で「イエロー・サブマリンの少年」を知ることもなかろう。また、その少年と知る機会がなかったら、壁に囲まれたその街にある図書館での「夢読み」仕事と、16歳少女との不毛な恋の成就を、少年にバトンタッチすることは出来なかろう。従って、村上春樹が最初に旧作「街、とその不確かな壁」を書き直すつもりで第一部を仕上げたが、第二部と第三部を書き加えて出来た『街とその不確かな壁』を三部構成の部ごとの関係を見ると、第一部から第二部へ、また第二部から第三部へ、さらに第三部から再び第一部へとあるようなサー

44「だってぼくはもともとあなたであり、あなたはもともとぼくなのですから」（P618）、「ぼくらはもともとがひとつだったのです。でもわけあって、このように別々の個体になってしまいました。しかし、この町でなら、もう一度ぼくらは一体になることができます」（P618）と少年は説明している。

45 少年の読書歴については、「私の十六か十七歳の時だって似たようなものだったかもしれない」（P403）と「私」が自分の経歴を少年に重ねて見ている。

46「その夏、私は十七歳だった。そして私の中では、時間はそこで実質的に停止していた」（P212）

クルが形成し、「何かと何かが繋がっている」（P219）ような完結した形の作品が完成したと言えよう。こうして見れば、緻密に計算し、構成を組み立てた三部構成の『街とその不確かな壁』は、決して福嶋亮大が「生成 AI が村上春樹になりすまして書いたような印象を受ける」[47]と酷評した作品ではない。それは今まで取り扱った主題を再度用いながらも、旧作から 40 年間生きながらえている村上春樹が多くの試練に耐えて描き得た一傑作だと評価すべきであろう。そして、新作を一傑作たらしめたのは、幽霊（死者）の子易にほかならないのである。このように、村上春樹の『街とその不確かな壁』における生と死は、必ずしもかけ離れたものではなく、親近感のある隣り合わせ同志のようなものなのである。

四、結論—時空を超えた川端康成と村上春樹が描出した「超時空の主題」

世界的に名高い川端康成と村上春樹がどのように「日本人の心の精髄を優れた感受性で表現する、その物語の巧みさ」を表出しているかを研究意識に持ち、始めた本論文では、『掌の小説』に収録された「不死」と『街とその不確かな壁』の考察を試みた。その結果、「不死」と『街とその不確かな壁』に描出された「超時空の主題」の一つである生と死について、次の結論を導くことが出来た。

まず、死後の世界で恋人同士は年がかけ離れるようになってから再会を果たしたことが共通点として挙げられる。「不死」では、恋人同士が 18 歳の娘と老人の姿で死後の世界で再会を果たし、恋を成就させた。一方、『街とその不確かな壁』では、恋人同士が 16 歳の娘と 45 歳の中年の姿で、死者の世界（その街）で再会した。ただし、『街とその不確かな壁』の場合は、16 歳の娘が恋人の「私」のことを全然覚えていない故、実らなかった恋は相変わらず不毛となって

[47] 福嶋亮大「村上春樹による村上春樹のリマスターは成功したのか——『街とその不確かな壁』評」https://realsound.jp/book/2023/04/post-1307772.html（2023 年 9 月 15 日閲覧）では、「生成 AI が村上春樹になりすまして書いたような印象を受ける」とある。

臺灣學術期刊資料庫

しまったままである。ちなみに、川端康成の「不死」では、死者を偲びつづける生者がいなくなると、死者のこの世での本当の死が訪れるという考え方は、村上春樹の「独立器官」にも見られる。

次は、生から死へと繋がり、地続きしている生と死の形が描かれたことが共通している。「不死」の場合は、娘、老人の生が終わった後、その死が始まる、いわば時間を前後にして訪れてくる生と死が、再会の機縁に恵まれ、恋人同士が共に霊体の形で「大樹」を通り抜け、永遠なる「不死」の境地に達している。それに対して、『街とその不確かな壁』では、相手の「きみ」の生が終わったが、「君」のいる街（死者の世界）へ会いに行った「私」は、再び元の町（生者の世界）へ戻れたため、実質的に死ななかった。これは生死を時間軸に沿って描くのではなく、同時に存在する「生者の世界」と「死者の世界」との空間を往還するような形で描いているのである。『街とその不確かな壁』では、死んでも別の形で現れるのは、「君」以外に、人間の「仮初めの姿かたち」（P290）の幽霊（死者）の子易である。子易が福島県「Z＊＊街図書館」（P213）への転職と、「イエロー・サブマリンの少年」を繋げてくれたため、「私」が「死者の世界」（街）へ再び行き、そこで「生者の世界」（町）で行方不明となった「イエロー・サブマリンの少年」と会い、少年時代の過去の自分を思わせる少年に「夢読み」の仕事と不毛な恋の後継者として委ね、「生者の世界」（町）に戻って来られたのである。過去への未練や執着を断ち切らない限り、この「生者の世界」（町）にいる「三十六歳」（P481）の女性[48]との「共に生きていく」道が閉ざされ、新しい恋へと展開することは到底無理であろう。そこで、「死者の世界」（街）から2度目戻ってきた「私」が、新しい未来を迎えようとしていることの暗示が読み取れよう。

両作品の相違と言えば、何と言っても川端作品の「不死」にはない、「死者の世界」と「生者の世界」を行き来する空間的な移動パタ

[48] 性的抵抗を示した36歳の女性が、『ノールウェーの森』（1987）の直子を思わせる。

臺大學術期刊資料庫

ーンが『街とその不確かな壁』にあることを挙げなくてはならない。言うまでもなく、異空間を移動する物語の巧みさを村上春樹の方が得意としている。このように、村上春樹の『街とその不確かな壁』には、川端の「不死」で「永遠」を意味する生と死（不死）はないが、「死者」と「生者」が同じ空間に存在するだけではなく、「死者」と「生者」が同次元で齟齬なく意思疎通を行い、「死者の世界」と「生者の世界」を往還するように表出し得たことは、村上春樹文学の独特的な描写だと言えよう。

村上春樹自身が、文体においては川端康成と異なっていると言ったが、川端康成がノーベル文学賞を受賞した理由「日本人の心の精髄を優れた感受性で表現する、その物語の巧みさ」を村上春樹文学にも当てはめられると言えよう。川端康成と村上春樹が作家として文筆生活を営む時代が違うため、両者の優劣を論じることは毛頭にないが、同じく死生・霊感と大きく関わる「超時空の主題」を取り扱う際に川端康成と村上春樹が各自に死生・霊感を描く本領を発揮した。また、それぞれの描出が日本人の心を揺さぶり、その心底に響き合う琴線に触れ、各自ならではの「醍醐味」を醸し出していると窺われる。それこそ、川端康成と村上春樹の知名度が衰えることなく、日本文学史に刻まれているに値する真価だと認められよう。

【付記】本論文は 112 年度科技部研究計画案（MOST 111-2410-H-032-058 MY2）による研究成果の一部分である。

【テキスト】

（1983・初 1981）『川端康成全集第一巻』新潮社
（2004・初 1990）『村上春樹全作品 1979～1989①風の歌を聴け・1979 年のピンボール』講談社
村上春樹（2014）『女のいない男たち』文藝春秋

臺大學術期刊資料庫

村上春樹（2023）『街とその不確かな壁』新潮社

【参考文献】

（一）書籍・論文

松坂俊夫（1971）「「掌の小説」小論――川端文学の源流」『川端康成の人間と芸術』教育研究センター

稲村博（1975）『川端康成』金剛出版

長谷川泉（1977）『川端康成研究叢書２詩魂の源流掌の小説』教育出版センター

鳥羽徹哉・原善編（1998）『川端康成全作品研究辞典』勉誠出版

川端文学研究会編（2001）『論集川端康成―掌の小説』おうふう

村上春樹（2012）「書くことは、ちょうど、目覚めながら夢見るようなもの」『夢を見るために毎朝僕は目覚めるのです　村上春樹インタビュー集1997-2011』文藝春秋P157

（2023）「【特集】七つの視座で読む村上春樹新作」『新潮』第6号新潮社

小川洋子（2023）「垂直移動に耐える」『新潮』第6号新潮社P135-137

上田岳弘（2023）「継承とリライト」『文學界』第6号文藝春秋P19

曽秋桂（2023）「『街とその不確かな壁』における幽霊子易辰也の人間「擬態」―連鎖する生と死―」『2023年第12回村上春樹国際シンポジウム』P190-197淡江大学村上春樹研究センター

邵丹（2023）「村上春樹『街とその不確かな壁』長篇書評わが唯一つの望み」『群像』第78巻第7号講談社P209

（二）ネット資料

「書評村上春樹さん6年ぶりの長編『街とその不確かな壁』迷宮をさまよう混沌世界」

https://books.j-cast.com/topics/2023/04/14020900.html（2023年5月20日閲覧）

「なぜ川端康成が選ばれたの？」

https://www3.nhk.or.jp/news/special/nobelprize/2020/literature/article_02_01.html（2023年2月　18日閲覧）

臺大學術期刊資料庫

「トーハン調べ2023年上半期ベストセラー総合1位、日販調べ2023年上半期ベストセラー総合1位、オリコン調べ上半期BOOKランキング2023の1位と、3冠を達成いたしました」
https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000001013.000047877.html（2023年6月1日閲覧）

「上半期一番売れた本は村上春樹『街とその不確かな壁』40万部を突破」
https://news.yahoo.co.jp/articles/cb4d091df7256a1715d7767772b3395ae61d8c66（2023年7月14日閲覧）

臺大學術期刊資料庫